



01・智絵里と真夏の白昼夢

とある年の夏。八月十八日、水曜日、十五時ごろ。

日本のとある、かなり寒い地域の政令指定都市。

天気は晴れ。気温は二十六度程度。

涼しくなつてはきたが、まだ日差しの強い夏の午後である。

場所は、市内のとある高級住宅地。

『鹿島 智絵里（かしま ちえり）』の自宅裏庭だ。

その小さな一角は、裏手には山がそびえ、さらに家全体は屏で覆われている。つまり立地上、外からはほとんど見えない。

野外でありながら、まるで秘密の空間のようになつてているのだ。家の中から覗く場合も、手段は限られる。

小さく一つだけある窓から、意識して見ようとしなければ、そこは見えないからだ。当然声も、ひそめていれば、ほとんど聞こえない。

そんな裏庭で、主人公と智絵里は今、ぽつんと置かれた大きなベンチに座っている。それはあまり使われず放置されていたものを、わざわざ動かして、こつそり手入れしたものだ。

ここには他に物置しかないし、遊ぶには適していない。

この時間帯、日当たりも異様にいいし、そもそも家に入ればリビングも、智絵里の自室もある。

わざわざここを選んで何かをする必要はない。

……たとえば、誰にも見つかりたくない事をしたいのに、どうしてもそれを外でしたい場合以外には。

智絵里、主人公に後ろから抱きしめられる形で座りながら、喜びをこらえきれずにいる。くすくすと嬉しそうに笑いながら、首から上だけを主人公に向け、慣れた様子で小さな口を開けると、挑発するかのように舌を差し出す。

そんな智絵里のスカートの中には、今、主人公の右手が入っている。

白く細いそれは、下着のさら下でうごめき、智絵里の性器を愛撫している。

智絵里は主人公がこんな場所で、夢中で自分を求めている事が嬉しくて、とにかく愉快でたまらないのだ。

SE1 外の環境音

【最初から最後まで流す】

【繰り返して流す】

【0～5秒ほどまで流してセリフ】

【そのまま、トラック終了まで流し続ける】

「【※5回※ キスする。

ゆっくり、ねつとりとした、自分から舌を出して、主人公に吸つてもらうディープキス。

年齢に不相応なほど慣れていて、これまで幾度となく主人公とキスしてきた事がわかる
キス】

ん……ん。ちゅ
ちゅっ……ちゅ
♥

【※1回※ キスする。

キスしながら、嬉しくて笑う。

主人公が夢中で舌を吸つてくるのがたまらない】

んふふ……ちゅっ
♥】

SE2 主人公が智絵里の股間を愛撫する水音

【最初から最後まで流す】

【繰り返して流す】

【0～1秒ほどまで流してセリフ】

【そのまま、▲1まで流し続ける】

「【※唇をふきがれた状態で※ 甘つたるく喘ぐ。

キスしながら主人公が、特に気持ちいいところを愛撫してきたので、びくつとする】
ん……！ うつ♥

【※6回※ ゆっくり呼吸する。

『ゆっくり』から『すごくゆっくり』という感じで、だんだんゆっくりになっていく。
驚きと快感で思わず唇を離してしまった。

簡単にいくのが癪で、必死に快感に耐えようとしている】

はーっ……すう♥
はーっ……すう♥

はああっ……すー♥

【※3回※ 少し早く呼吸する。

ものすごく気持ちいい。

そのせいで、息を整える事が出来なくなってしまった】

はあ、はあ、はあ。

【甘つたるく喘ぐ。

ただでさえイキそうだった所に、ダメ押しのよう強い快感が訪れたので】
あつ……♥

【ゆっくりと、低く、かわいく喘ぐ。

いく事に対する、最後の抵抗のように喘ぐ】

あ、あ、あ。

あつ
♥

【※ここでいく。『イッた』事を、比較的わかりやすく表現する※

ひとりわ甘つたるく、びくつと身を震わせて喘ぐ。

抵抗したのに、ここであえなくいく】

ああ……つ♥】

▲1 ここでS E 2 がストップする。

「【※6回※ ゆっくり呼吸する。

『ゆっくり』から『ものすごくゆっくり』という感じで、ゆっくりになっていく。
主人公はもう攻めてこない。

智絵里もイカされ慣れすぎていて、いつもそうしているように、主人公によりかかった
状態で呼吸を整える】

はー。はー。はー。

はー……♥ はー……♥ はー……♥

【※1回※ キスする。

軽く触れるだけだが、音が大きくするキス】

ちゅ♥

「くすくす笑いながら、少し苦しそうに話す。

まだ呼吸が整っていない。

それでも智絵里は、嬉しそうに主人公を煽る。

智絵里は自分の性的魅力が、主人公を狂わせている事がたまらない】

今日興奮しすぎじゃない？ 鼻息やばいよ。

【嬉しそうに。

『庭でするの』は『庭でセックスするの』の略】

庭でするの、ほんと好きだよね♥

【嬉しそうに。

自分達が座っているベンチを指して。

『やる用の』とは『セックスする場所として最適な』という意味】

この椅子の事、やる用の場所だと思つてない？

【少し間をあけてから。

『こんな事』は『ん』を強調して言う。

よつて『こーんな』ではなく『こんーな』になる。これは智絵里の話し方の癖。

『こんな事』が具体的に何なののかは、ここではばかす。

ここではあたかも『庭でセツクスする事』かのように誤認させる】
てか、こんーな事の為に頑張ってたんだ。

【上機嫌でくすくすと笑う。

嬉しくてたまらない。

それは一見『主人公を嘲笑している』ようだが、実際はそうではない。

智絵里は『そんなにも主人公が欲情している事が嬉しい』のだ】

ウケる。ふふ。ふふふふ♥

【※1回※ キスされる。

生意氣を言つている唇を、優しく塞がれる】
んつ……♥

【※3回※ キスされる。

自分の唇を、主人公の舌でこじ開けられる】
ん。ん。んつ……♥

【※4回※ キスする。

主人公の舌に口の中を占領されるディープキス。
少し苦しそうにするが、やはり嬉しくてたまらない。

智絵里はとにかく『主人公に少し強引に求められる事』に強い喜びを感じる傾向がある
んつ……♥ んつ、ん。んつ♥

【※1回※ キスする。

舌を絡められ、一方的に攻められるキス
んー……♥

【唇を離す】



【※2回※ 早く呼吸する。

会話を遮った強引なキスが嬉しくてたまらず、呼吸が荒い。

主人公には鼻息が荒い事を意地悪に指摘しておきながら、自分も似たような状況になつ
ている

はあ、はあ
♥

【少し間をあけてから。

にやにやと嬉しそうに。キスで妨害されてもなお、主人公を煽りたい。
しかし、まだやはり呼吸が少し苦しい。

『対局』とは、昨日行つたチエスの対局の事】

どうせ対局中もさ?

私の事ばつか考えてたんでしょ♥

【嬉しそうに。

昨日の対局は、主人公が勝てば、翌日智絵里を自由にできる権利が与えられるルールだった。なので『勝利後、具体的にどうしようか考えながら指していたのだろう?』と指摘している】

『この勝負で勝つたら、どんな風に私を犯すか』そんな事ばつか考えてたんでしょ♥】

〈主人公〉

「……♥」

「少し間をあけてから。

図星らしい事が、ものすごく嬉しい。
きやつきやと、嬉しそうに指摘する

あ……♥ 当たり?

【にやにや、嬉しそうに笑いながら】

ふうん……♥】

S E 3　主人公が智絵里の股間を愛撫する水音2

【最初から最後まで流す】

【繰り返して流す】

【セリフと重ねて流す】

【0～1秒ほどまで流してセリフ】

【▲2で一段階スピードが速くなる】

【そのまま、▲3まで流し続け、S E 4と切り替える】

「【※びくつとして※甘ったるく喘ぐ。

性器への愛撫が再開したので。

的確な愛撫をされて、ものすごく気持ちいい。

主人公は、どうすれば智絵里が感じるかを、完全に把握している】
あ。

【それでも主人公を煽ろうとするが、うまく喋れない。

あまりにも気持ちよすぎる】

こんな風に触るつ、つもり。だつたんだ♥

【甘つたるく喘ぐ。話すのを諦めてしまうほど気持ちいい】

ん。う
♥

【※3回※ かなりゆっくりと呼吸する。
ゆっくり呼吸する事で快感に耐えて、また話し始めようとしている】
ふー……。ふー……♥ ふー……♥】

▲2 ここでSE3が、一段階早いスピードになる。

「甘つたるく喘ぐ。

先ほどよりも少し早く、容赦なく気持ちよくされる。

それは、智絵里の発言を許さないような攻め方。

智絵里の目論見は、当然のように見抜かれている】

あ……
♥

【少し早いテンポで、甘つたるく喘ぐ。

最短でイかせる気のような、気持ちよすぎる愛撫をされて】

あつ。あつ。あ。あつ……
♥

【※6回※ 長めに間をあけてから、早く呼吸する。

必死に、いかないように耐える。

智絵里は主人公に日常的にイかされており、どんな恥ずかしい事もすでにされている。

それでも尚、簡単に屈したくはない。抵抗する】
はーはー、はーはー、はーはあ……♥

【呼吸も絶え絶えなのに、それでもにやにやと煽る】
やらしー……♥

【※6回※ 早めに呼吸する。

先ほどよりも少し落ち着いている】

ふーはー、ふーはー、ふーはあ……♥

【少し間をあけてから。

まだ苦しいが、にやにやと甘々に切り出す。

『何とか耐えきつて、話せるようになつた』という感じで】

ねえ……♥

今日先生が言つてたよ？

【教師の言葉を伝言する】

『最近智絵里（ちえり）ちゃん、成績ますますよくなつたね』って。

『お隣のお姉ちゃんといつも一緒に頑張つてるからかな？』って。

【にやにやと意地悪を言う。

ますます興奮してくる。

セックス中に第三者の話題を出す事で背徳感が増し、呼吸が荒くなる】

そのお姉ちゃんが私に何してるかバレたらさ?

皆(みんな)倒れちやうね?

【少し間をあけてから。少し意地悪に】

教えてあげたいね。

【ここから次の※マークのセリフ終わりまで、『。』ごとにゆっくりと、主人公に少し意地悪に、言い聞かせるように話す。

耳元でささやいているようなイメージ】

智絵里はお隣のお姉ちゃんに、毎日犯されます。

毎日『勉強教えてもらう』って言つて一緒に居て。

何かにつけて勝負して。

勝つた方は、負けた方を自由にできる。

そんな事繰り返してるうちに。

【『やる』は『セックスする』という意味。

『プレー』は『プレイ』と同義だが『ー』で読む】

庭で平気でやるような、ありえない変態プレーするようになつちやいましたつて♥】※

〈主人公〉

「……つ……♥」

主人公、反論こそしないものの、智絵里の言葉に煽られ、激しく興奮してくる。すべては智絵里の指摘通りだ。

主人公は智絵里に、許されない事をしている。

こんな事が知られたら、主人公はただでは済まないだろう。

『自分が咎められるならそれでいい』と思うが、それは甘い考えだ。

もしこの事実が明るみになつたら、主人公は智絵里だけではなく、その周囲も不幸にするに違いない。

そうと理解していながら、主人公は今日も智絵里を抱いている。

智絵里は出会つてから何年経つても昔の面影を残し、その癖、心だけがいびつに成長した。

幼い少女のように無邪気にふるまいながら、成熟しきつた女性のような狡猾さで、持てるすべてを使つて、主人公を誘惑してくる。

それが主人公を狂わせる。

主人公は智絵里の、己の美しさを自覚しながらも恐れ、疎ましく感じ、持て余した結果、その鬱憤を主人公相手に発散するようになつた事を、痛ましく思つている。

それとともに、愛おしくも思っている。

智絵里はこれまで、その美貌ゆえに、遭わなくともいい不幸に遭い続け、傷ついてきた。そのたびに内にこもり、人嫌いになつて、幼馴染である主人公に依存するようになつていった。

主人公はそれが辛かつた。

どうにかして智絵里が安心して過ごせる場所と存在が、お互いの家と、お互いの家族以外にできないものだらうかと、策を講じ続けた。

今だつてそれは変わらない。いつだつて智絵里の幸せを望んでいる。

だけど同時に、主人公は嬉しかつたのだ。

智絵里のように気難しく、繊細な気質の少女が、自分だけは心を許し、自由に振る舞つてくれる。

自分にだけは強い執着心を抱いて、歪んだ欲望の全てをぶつけてくれる。

主人公はそれがたとえようもなく嬉しく、そのすべてを『自分だけが受け止めたい』『自分が独占したい』と思うようになつてしまつたのだ。

だから主人公は間違えた。

ある日智絵里が願望を打ち明けた時、『だめだ』と言うべきところで『いいよ』と言つた。『せめて時期を待つべきだ』と諭すべきところで『今すぐにしよう』と応じた。

その結果が、今だ。

▲3 ここでSE3がストップし、SE4と切り替わる。

SE4 主公が智絵里の股間を愛撫する水音3

【最初から最後まで流す】

【繰り返して流す】

【セリフと重ねて流す】

【0～1秒ほどまで流してセリフ】

【そのまま、▲4まで流し続け、SE5と切り替える】

「小さく、うめくようになんぐ。

少し驚いている。

クリトリスを愛撫していた指先が、膣内に挿入されたので

あ……！

あつ ♡ グ。

うつ ♡

【甘ったるく喘ぐ。】

あっさりと挿入され切って、呼吸も苦しいほど内側を占領されて
ああっ……♥

【少し苦しそうに、でも気持ちよさそうに、甘い異物感のあるまま話す。
主人公が強硬手段に出たので、嬉しくてたまらない。
完全に望み通りの展開になつていて】

ちょつ……ときあ……♥

【『挿れる』は『指を膣内に挿入する』という意味。
こうは言うものの、まるで嫌がつていな。

むしろ、主人公の少し強引な行為に興奮している】
話してゐる最中に挿（い）れるとか、おかしいでしょ……♥

【※3回※ ゆっくり呼吸する。

気持ちよくて、呼吸さえ甘つたるくなつていて】

はー♥ はー♥ はー♥

【ゆっくり喘ぐ。ゆっくり出し入れされたので。

声が高くなつたり低くなつたりする。

改行ごとに少し間が空くイメージ。

主人公の指が届く一番奥から、指が完全に出て行つてしまふぎりぎりまで丁寧に往復されて、めちゃくちやに気持ちいい。

主人公は強引な手段を取る事はあるが、乱暴な事は決してしない。
つまり智絵里は、どう転んでも必ず幸福感に満たされ、気持ちいい。
まるで、指の動きに合わせて鳴かされているような、喘ぎ】

あ……♥

あ。

ああ……つ♥

あつ。あ。

ああつ……♥

【ゆっくりと、何とか話す。

呼吸も絶え絶えなのに、それでも嬉しそうに煽る。

『そんなどから』が『そん……つなどから』になる】

そん……つなどから♥ 年上の癖にさ♥

チエスでも何（なん）のゲームでも、全然私に勝てないんだよ？

【※3回※ キスする。

意地悪を言いながら、またも言葉を遮るような主人公のキスを受け入れる】

ちゅ♥ ちゅつ♥ ちゅ♥

【少し間をあけてから。

少し苦しそうに、でも嬉しそうに】

攻め方がいつも同じで♥ 単調なんだよね♥

『そつち』とは主人公の事。

智絵里は昔から主人公の事を『お姉ちゃん』と呼んでいる。
しかし二人きりの時だけは照れてそう呼びたがらず、今では『そつち』と、ぶっきらぼうな呼び方をする。

『チエスを始めた時期も、主人公の方が早かつたのに』と言いたい】
始めたのだって、そつちのが早かつたのに】

〈主人公〉

「…………つ」

「あえて少しゆっくりめに言つて、言い聞かせる。
にやにやと嬉しそうに。さらに興奮してくる。

指摘を受けた主人公の、少し悔しそうな、切なげな表情がたまらない】
このままじゃ一生♥ 私に負け人生だよ？

【※6回※ キスする。

意地悪を言いながら、やはり言葉を遮つてくる主人公のキスを受け入れる。
お互い舌を絡ませ合う、ラブラブカップルの見本のようなキス】

んつ♥　んつ。ふー……♥

んんう。ちゅつ。ちゅるつ♥

【※4回※ ゆっくり、荒く呼吸する。

めちゃくちゃに興奮している】

はーふう、はーふう……♥』

▲4 ここでSE4がストップし、SE5と切り替わる。

SE5　主人公が智絵里の股間を愛撫する水音4

【最初から最後まで流す】

【繰り返して流す】

【セリフと重ねて流す】

【0—1秒ほどまで流してセリフ】

【▲5 で一段階スピードが速くなる】

【その後、そのまま、▲6 まで流し続ける】

「うめくように喘ぐ。

さらに的確に攻められて。

主人公が悔しさのあまり、早急に自分をイカせようとしている事を理解する】

うつ
♥

【苦しそうに、しかしにやにやと満足げに。

『こやつて』は『こうやつて』の略】

こやつて、反論できなくなるとすぐイかせようとするの、ほんとザコい
エロい事だけは上手（うま）くなれて♥ よかつたねつ……♥

【高く甘い声で喘ぐ。

ふいに独り言のようになる。気持ちよすぎて。

もつと煽りたかったのに、あつという間に快感に負けそうになつてくる。

『気持ちいい』が『気持ちい』になる。

以後『気持ちい』はすべて『気持ちいい』の略。】

あ。気持ちい……♥

やば……♥

【途端に甘えた声を出す。

いかにもセックス慣れしている、媚びた声。

多少生意氣や意地悪を言つても、おねだりすれば、主人公は必ずその通り気持ちよくしててくれる事を理解している】

ねえ。これ好きい。このままして？

あ……♥ あ。あ。ああつ……♥

【苦しそうに、でも甘々に早口で。

主人公が本気ですぐにいかせようとしていると理解する】
あ。やっぱ。一回イツていい？ イきたい♥

【甘々におねだりする。気持ちよすぎて、理性がなくなつてくる。
実際はキスしてほしいだけ。

智絵里は声を我慢する事に慣れている。

なので、別に唇をふさがれなくても、極端に大きな声など出ない
ねえちゅーして？ おつきい声出ちゃう……♥】

▲5 ここでSE5が、一段階早いスピードになる。

「※4回※ キスする。

一方的に攻められて、唇をふさがれるキス】

んつ♥ ふ♥ んつ。んー……♥

【※3回※ とてもゆっくり呼吸する。

呼吸を整えようとしている】

はーつ。はーつ。はー……♥

【低い声でびくつと喘ぐ。いく事を悟る】

あつ。あ……♥

【※ここでいく。『イツた』事を、比較的わかりやすく表現する※

高く甘い声で喘ぐ。

さほど前触れもなく、あつさりいく】

あつ……♥

【※6回※ 呼吸する。

『早め』から『少しずつゆっくり』という感じで、ゆっくりになっていく。

先ほど同様、主人公はもう攻めてこない。

先ほどと違うのは、智絵里がよりとろとろになっている事である】

はーつ。はーつ。はー。

はーつ。はーつ。はー……♥

【うつとりと。ひとりごとのように。

すでに意地悪を言う気は完全に失せ、素に戻っている】

気持ちよかつた……♥

【※3回※ キスする。

先ほど同様、イツた後にいつもしてもらっている、甘々な恋人キス】

んつ。ふ。んつ……♥

【※3回※ とてもゆっくり呼吸する。

呼吸を整えようとしている】

はー……はー……。はー……♥』

▲6 ここでSE5がストップする。

SE6 主人が智絵里の髪を撫でる音
【最初から最後まで流す】

智絵里、今日二度目の絶頂にいたると、身体を動かして、正面から両足を主人公に絡める。

主人公に抱きつき、しがみついた状態で、呼吸を整えようとしているのだ。

それはあまりにも慣れ切った動作で、二人の中ではすでに日常化したものである。

そうであるにもかかわらず、いや、そうであるからこそ、主人公は興奮する。

智絵里にこんなにも当たり前のように甘えられる時、主人公は、自分は智絵里のものであり、智絵里もまた自分のものなのだと確信する。

どちらに交わり続けた結果、もはや切り離し方がわからない関係になってしまった事を痛感する。

それは、何物にも代えられないほどの喜びだった。

『これさえあれば、自分はどんな事でもできる』そう思うほどのものだった。

しかし同時に、それがとても醜い感情である事を、主人公は理解していた。

だから主人公は、いつもそうしているように智絵里の髪を優しく撫で、そのまま彼女が落ち着くのを待つ。

そんな智絵里の靴は、もうとっくに両方とも脱げている。

陽光にさらされる小さな足指さえ、今の主人公にとつては、直視できないほど性的だった。

しばし沈黙。

「【※マークのセリフ終わりまで、まだ少し苦しそうに話す。

ふと気づいたように話し始める。

しかし実際は『いつこの件を切り出そうか』と考えていた】

……ああ。

【にやにやと嬉しそうに。

呼吸が落ち着いて、両手両足を絡めた対面座位の体勢で、主人公を正面から見つめて話している。

ついさっきまでのしおらしさはすでに失せ、また生意気な態度に戻っている】

そうだ。

【さらっと言う。切り出すタイミングを待っていたのは隠そうとする。

『あれ』とは何かは、まだ明かされない】

そろそろ『あれ』する?】※

智絵里、主人公を正面から見つめながら、昨日の対局の話題を持ち出す。

昨日のそれは結局引き分けに終わり、数ある引き分けの中でも、『戦力不足』に該当するものとなつた。

それではもちろん、主人公の勝利とは言えない。

しかし、実力差のある主人公と智絵里では、この引き分け方をする事自体がまれである。ゆえに智絵里はこれを『自分の負け』と判断した。

『仕方なくお願ひを聞いてあげる』という体で、主人公の欲望にのまれる事にしたのだ。

「くすくすと笑いながら、嬉しそうに】

昨日珍しく私に引き分けて。

何お願ひしてくるのかと思つたら……。

【愉快でたまらない。主人公の歪んだ嗜好について、さらに理解する事ができたので。

自分の服を触りながら話している】

『昔の服着てほしい』とかさあ♥

【少し苦々しそうに。

当時、自分がこの服を着ている時は、いつも主人公がなんだかよそよそしいような気がして、淋しかつた事を思い出しているので。

それもあって、この服は結局あまり着なかつた。

数年前のものであるにしては、ずいぶんと状態がいいのはそのためである】

この服、嫌いなんだと思つてたけど。

【しかし、ここで主人公の反応を見て確信する。

これまで仮説でしかなかつた『主人公は、当時すでに智絵里を性的な目で見ており、この服を着た智絵里が、直視できないほど魅力的だったから冷たかつたのだ』という説が、正しかった事を理解する。

なので、機嫌が良くなる。

もはや、その時からずっと『自分に欲情しながらも、我慢して、隠して。何かのきっかけでもなければ、生涯欲望を胸に秘めていただろう』主人公の事がいとおしくてたまらない。

『そういう目』とはむろん『性的な目線』という意味】

つまりこのワンピ着てた頃には、私の事そういう目で見てたつて事か♥】

智絵里、話しながら、当時の事を思い出す。

主人公は当時から智絵里に優しく、何をする時も、常に智絵里を最優先に行動していた。智絵里はそれが嬉しかったが、不安でもあった。

智絵里は当時から主人公に想いを寄せており、自分には主人公しかいないと思っていた。だが、主人公が、自分と同じ重さの感情を抱いているとは、とても思えなかつたからだ。主人公は当時から、誰にでも親切な、折り目正しい優等生だつた。

ゆえに『相手が智絵里だから』優しくしてくれている。特別扱いしてくれている。とは、思い難かつたのである。

同時に智絵里は、自分の人見知りで、人と打ち解けるのが苦手な性格を自覚していた。だから『主人公は、人付き合いが苦手な自分を哀れに思っている』『だから、本当は自分がよりも他の子と一緒に居る方が楽しい』『なのに、幼馴染だから仕方なく、そばにいてくれるのではないか』という不安が、常に消えずにいたのである。

だから、どれだけ主人公が自分に献身的に寄り添い、愛のこもつた言葉をかけてくれても、自信が持てなかつたのだ。

だから智絵里は『あの時』あのような行動に出た。

智絵里は『あの時』、主人公の関心が自分からいよいよ離れ、自分以外の誰かに愛情を注ぐのだと思い込み、そんな事は、とても耐えられないと思つていた。

それを阻止できるなら、自分はどんな事でもする。

どれだけみつともなくとも構わないから、主人公の心をつなぎ留める。

そう思つたのだ。

それが、あんな形でうまく行くとは思つていなかつたが……。

「少し間をあけてから。

当時の事を思い出している】

あの頃もいつも優しくしてくれたけど。

【ゆっくりと、少し意地悪に。

『主人公が過去、自分にどのような欲望を抱いていたのか』を説明してあげている。

しかしこれは、主人公に直接確認したものではない。

あくまで智絵里の推測であり、願望である】

『私は智絵里の優しいお姉さんです』みたいな顔しながら。ほんとは『ナカに挿（い）

れたい。無理矢理指突っ込んで、めちゃくちやに犯して泣かせたい』とか思つてたの？

【※マークのセリフ終わりまで、

ものすごく上機嫌で。勝ち誇った気分で。

まるで『最高』と言つているかのよう『最低』と言う
さいてー。

変態すぎて救いようないね？ ふふふ♥

【にやにやと、少し意地悪なトーンで。

智絵里としては、意地悪のつもりで言つている。
しかし、これでは『幼馴染だから、好きだから、すべてを受け入れて許している』と告
白しているのと同義である】

幼馴染じやなかつたら、絶対許さない』 ※

S E 7 智絵里がベンチから立ち上がる音

【最初から最後まで流す】

智絵里、おもむろにベンチから立ち上がりと、主人公の正面に立つ。
裸足のまま立つので主人公は驚くが、今の智絵里は、そんな事すら気にならないらしい。
おまけにそこは、あつらえたように絶妙な高さだ。

主人公のちょうど頭の位置に、智絵里の股間が来る形となる。

これによつて主人公はますますたじろぐが、その反応では、より智絵里を煽るだけだ。
智絵里はさも満足げに左耳側の髪の毛を耳にかけると、嬉しそうに主人公を見下ろす。

それからワンピースのスカートを両手でめくりあげて、主人公にその真っ白な下腹部を、こともなげに見せつけた。

SE8 智絵里がワンピースのスカートをめくる音

【最初から最後まで流す】

「わざとらしいほど優しく、ささやくように」

ほら、見なよ。

【※マークのセリフ終わりまで、ゆっくりと、少し意地悪に。】

『主人公が今、自分に何をさせようとしているのか』を説明してあげている
子供の頃の服着てる私に、スカートめくらせて。
パンツ見せてもらいたかったんでしょ？

【少し間をあけてから。】

挑発するように。

ちらりと主人公を観察して、あからさまに興奮しているのを確認してから話しているイ
メージ】

どう？ 嬉しい？』※

「主人公」

「…………♥」

そんなの、答えるまでもない。

その通りだ。主人公ははずつと、この服を着た智絵里を汚したかった。

ただ隣の家に住んでいるというだけで、訳もわからないほど自分を慕ってくれ、懷いてくれる少女。

そうされたこちらがどんな気持ちでいるかなど知りもせず、全幅の信頼を寄せてくる少女。

そんな智絵里に、幼き日の主人公は簡単に狂わされ、恋と欲というものを知った。

智絵里の甘い髪の匂いを嗅ぎながら、押し付けられた胸の鼓動を聞きながら、自分のようない人間では決して『隣の優しいお姉ちゃん』にはなれないと思い知らされた。

それでもどうにか努力して、いつまでも智絵里のそばに居られる人間でありたい。

そう思っていたのに、その夢はある日たやすく打ち碎かれた。

このワンピースを着た智絵里はあまりにも美しく、かわいらしく、主人公とは、あまりにも釣り合わない存在のように見えた。

だから主人公は思つた。

こんなにも智絵里が魅力的な事は、誰にも知られたくない。

智絵里にはずっと、自分以外には心を開かないでいてほしい。

ずっと『人嫌いの、気難しくて臆病な智絵里ちゃん』で居て、ずっとお互の家にこもるような暮らしをして、自分だけを見ていて欲しい。と。

智絵里への歪んだ欲望を自覚したのはこの時だ。

ただ、自分はそれを引き続き隠して生きていくのだろうと思つた。

いくら智絵里が自分を『好きだ』と言つてくれようと、それは自分が智絵里に抱く『好き』とは違う。

自分は一生、自分を偽りながら、いつか本物の『隣の優しいお姉ちゃん』になる事だけを夢見て生きていく。

本気でそう思つていた。

——だから食いついた。『それ以外の何か』になれるチャンスに。

もしも『それ以外の何か』になつたら『失うものがあまりにも多い』と。『取り返しのつかない事になる』とわかつていながら、それでも手を伸ばした。

智絵里の特別な存在であり続けたいというあさましい願いが、二人のあるべき、正しい未来を壊してしまつたのだ。

「上機嫌で。笑いと喜びをこらえきれない。」

主人公がわざわざこの服装を指定した上で、自分の下着を凝視している事が、たまらなく嬉しく、興奮している】

ふふ。ふふ♥ めっちゃ見てる。

【声が明らかに喜んでいる。

なので、非難しているつもりだが、まるでそうとは聞こえない。

過去の悲しかった記憶が塗り替えられていくような気分。

『そんな』は『そんなに』の略】

そんな見たかったんだ♥

【少し声のトーンが下がる。わざと下げて話している。

根拠のない意地悪を言つて、主人公を煽りたい】

ほんとどうかしてる。

頭ん中、やらしー事しか詰まってないから弱いんだよ♥】

主人公、智絵里にやにやと罵られながら、あまりにも蠱惑的なその姿にあてられ、いいよ何も考へる事ができなくなつてくる。

たとえどんなに責められても、智絵里に触れたい。

匂いを嗅ぎたい。その体温を感じて、その柔らかさを確かめて、智絵里が気持ちよくなところに触れて、智絵里が喘ぐ、可愛い声が聴きたい。

それ以外のすべてが、頭の中から消えていく。

「【※びくつとして※ 小さく喘ぐ。

ふいに指で下着ごしに股間に触れられて
んっ……♥」

〈主人公〉

「……ちいのこ……濡れてる……♥」

「きよとんとして。

『ちい』は智絵里のあだ名
え……?」

するとここで、智絵里が困ったような声を出す。

主人公の指摘に対し『何をいまさらそんな事を』と言つているようだ。

だが、主人公は確かめたかった。

当時、あれだけ嫌悪されると思つていた事を現実にしているのに、それが智絵里に受け入れられている。

この事実を実感したかったのだ。

「少し不思議そうに。

『なぜそんな、当たり前の事を聞くのだろう？　主人公にとつては、もはや少しも珍しい事ではないはずなのに』という感じで

そりやあ……濡れてるよ。

【だが、すぐに嬉しくなつてくる。

智絵里にとつては、主人公に犯される事が、何よりの喜びである。

なのでわざと『今日はすでに二回も犯されている』と口にする事で、主人公の事も、自分自身の事も興奮させようとしている】

もう今日、二回も犯されたんだもん。こうなるよ♥

S E 9　主人公が智絵里の股間に顔をうずめる音

【最初から最後まで流す】

主人公、智絵里の言葉に素直に欲情すると、その股間に顔をうずめる。

それから、なんの断りも、遠慮もなしに、下着越しに性器を舐め始める。

智絵里はそれを、喜んで受け入れる。

「きやっきやと嬉しそうに。

言葉とは裏腹に、少しも嫌がっていない。完全にこうなる事を待ち望んでいた。

また、主人公にクンニされる事にも慣れている】

うあ。ちょ、やだ♥

舐めんな♥

【甘つたるい声でたずねる。

嬉しくはあるが、少しだけ困惑もしているので。

確かに主人公の行動は、想定の範囲ではあった。

しかし智絵里は『自分が主人公に対してもう少し同じ事がしたいかと言うと、特別したいとは思わない』と考える。たとえば自分が『主人公を好きにしてもいい』と言われたら、もつと別の事をするだろう。少なくとも、布越しに肌は舐めないだろう。と考えたからである】

なんでパンツ舐めたがんの？

スカートに頭突っ込んで……パンツごしにつ……舐めて。

そういうのがしたかったの？

【困惑しているようで、答えを誘導している。

『智絵里のせいだ』と言われたい。『その言葉さえあれば、自分は主人公の、どんな理解不能な行為でも受け入れられる』と思っている】

どう育てばそういう発想になんの……?』

〈主人公〉

「大体ちいのせい……♥」

「うきうきと上機嫌で。

同時に、とても安心している。その言葉を待っていたので
へえ♥ 私のせい?』

主人公が答えると、智絵里の声が露骨に弾んだ。

主人公は、智絵里との『正しい未来』を壊した事を悔やんでいるが、智絵里自身はそれを喜んでいる。

なぜなら智絵里は、主人公が智絵里に劣情を抱くよりもずっと前から、主人公が好きだったからだ。

主人公を自分のものにできるなら、自分の何を差し出しても構わない。

ずっとそう思っていたからだ。

「とても満足げに笑う。

内心、とてもホツとしている。

『であればかまわない、好きにすればいい』と思つてゐる】

ふふ。そつか。ふふふふ♥

【上機嫌で、とても優しい声音で。

まるで、智絵里の方が年上かのような態度で】

じやあいよ？ 可哀想だから責任取つてあげる。

好きなだけ舐めな？】

SE10 主人公が智絵里の股間を下着越しに舐める水音

【最初から最後まで流す】

【繰り返して流す】

【セリフと重ねて流す】

【0—1秒ほどまで流してセリフ】

【その後、そのまま、▲7 まで流し続ける】

こうして主人公は、許可を得たのをいい事に、夢中で智絵里の股間を、下着越しに舐め続ける。

智絵里はそれを、興奮を抑えられないようすで、満足げに見下ろしている。

「甘ったるく喘ぐ。

股間を舐められ始めたので】

あつ……
♥

【※3回※ 呼吸する。

『まだ耐えられる気持ちはさである』と思いつめうとしている】

はあ。はあ。はあ……。

【高い声で小さく喘ぐ。

とても気持ちいい】

あああ……
♥

【※4回※ 荒く、ゆっくりと呼吸する。

かなり気持ちいい。

『まだ耐えられる気持ちはさである』と思いつめうとしているが、すでに、そう考えるのには無理がある】

はー。はー♥ はー。はー♥

【※2回※ 鼻で、興奮した息を整える。

話そようと、呼吸を整えて いる】

ふー。ふーつ……
♥

【少し間をあけてから。

これは感嘆詞の『あーあ』。喘ぎではない】

あーあ……♥

【快感に耐えながら、呆れたように自分達の両親の話をする。

智絵里は、今度は自分達の両親を使って、主人公の背徳感を煽ろうとしている】

うちの親もさあ……ほんとバカ。

娘が家（いえ）でやられてるのに、どうせ今頃『智絵里はお姉ちゃんと一緒に、眞面目に勉強してる』とか思つてるよ。

そつちの親も同じでしょ？

二人一緒だよって言つたら、なんでも許してくれるもんね。

【少し間をあけてから。

意地悪に、ささやくように】

ねえ。親とか先生裏切つて、自分より小さい女の子犯すの楽しいね？

【嬉しそうに、思いつく限りの罵倒をする。

しかし、実際にはそうさせたのは自分だという自覚がある】

ロリコン。異常性欲。色情狂（しきじょうきょう）】

主人公が反論の余地もなく智絵里の言葉を受け止めていると、ここで、ふと智絵里の声

がかけつた。

主人公は不思議に思うが、それこそが智絵里の本音だつた。智絵里が認識している、主人公の現状を述べたものだつた。

「少し間をあけてから。

声がかけつた印象になり、トーンが少し下がる。

それでも、智絵里としては、先ほどと変わらない態度を取つてゐるつもりである】
でも……うちの親も甘いけど。

一番甘いのはそっちだよね。

負けたからって素直に言う事聞いてないで。

怒つて『こんなのはやらない』って言えればよかつたのに。

何年も何年も、毎日私の命令聞いてるうちに。

こんなに性癖狂つちやうなんてさ』

二人の脳裏に『あの時』起きたすべてが浮かび上がる。

あの時、智絵里が主人公に、涙を流しながら頼んだ事。

主人公はそれを断るべきだったのに『隣の優しいお姉ちゃん』以外の存在になるために受け入れた事。

それはあまりにも幸せで、甘くて、嬉しくて。

ようやく欲しかったものを手に入れたような、もうこれ以外には何もいらないと本気で思えるような、素晴らしい瞬間だつた。

だけど同時に、絶対に許されないひとときでもあつた。

『あの時』二人は――……。

「【※マークまで、少しきなげに。

過去、主人公との関係を決定的に変えた出来事について語る。

智絵里はこの件について申し訳なく思つてゐるし、自分のせいで主人公が本来背負わずに済んだはずの罪を背負う事になつたのを理解している。すべては自分の責任だと、わかつてゐる。

しかし、謝つたところで、自分達はもう元に戻れない事、自分達は現状に幸福を感じるがゆえに戻せなくなつてゐる事も、理解してゐる。

ゆえに智絵里が『自分がぶつ壊した』と捉えているのは、主人公の性的嗜好であり、主人公の真つ当な未来の事である

……ごめんね。色々ぶつ壊しちやつて。

私があの時『一回でいいからえつちしてほしい』なんて言つたせいで。
私達、こんななつちやつたね……♥』※

智絵里の言葉に、主人公は胸が締め付けられるようだ。

そうだ。あの時の智絵里は、おかしな誤解をしていた。

『主人公に親しい異性ができたらしい』と。

『主人公はその異性に恋をしており、彼と過ごす時間を捻出したいと思っている』と。

『だから智絵里を鬱陶しく感じ、距離を置きたいと願っている』などと、何の根拠もない勘違いをしていた。

確かに当時、主人公には友人として仲良くしている異性がいた。

だが主人公は、智絵里以上に誰かを大切に想う事などありえないし、ましてや、恋愛対象にする事など絶対にない。

だから主人公は、すぐにそれを『可能な範囲で』説明した。

だが、『可能な範囲』で話したところで、智絵里が納得するはずもない。

その方法では『なぜ異性に恋愛感情を持たないと言い切れるのか』という問いに、答える事ができないからだ。

だから主人公は『いいよ』と言った。

どれだけ説明しても満足せず、『勝負に勝つたらお願ひ事を聞いて』と持ち掛けてきた智絵里に、『本当の気持ちを話して』と涙を流す智絵里に。

『勝負なんかしなくとも聞いてあげるよ』と答えて、智絵里の願いに応じる形で、想いを告白した。

それは主人公がそうしたかったからだ。
智絵里と特別な関係になりたいと打ち明けて、智絵里を抱いて、二度と離れられなくなりたい。

誰にも言えない秘密を共有して、ずるずると堕ちていきたい。

誰でもなく、主人公がそう思つたから『いいよ』と言つたのだ。
だから智絵里が罪悪感を抱く必要など、どこにもない。
ないはずなのに……。

「甘つたるく喘ぐ。

とても気持ちいい。

主人公が、今の智絵里の発言を否定するかのように、熱心に愛撫してくるので】

はあ……あ♥ あ♥ あ♥

【高い声で喘ぐ。ひときわ気持ちいい】

あ♥

【にやにやと嬉しそうに。

主人公が自分の発言を否定してくれたようで嬉しく、とてもホッとする。

それでもなお湧き上がる、申し訳ない気持ちを埋め合わせるかのように提案する
ねえ……ほんとは直（じか）に舐めたいんでしょ」

▲6 ここでSE10がストップする。

SE11 智絵里が下着を脱ぐ音

【最初から最後まで流す】

「くすくすと嬉しそうに】

いいよ？ すれば？」

SE12 智絵里が自分の股間に、主人公の頭を押し付ける音

【最初から最後まで流す】

「自分の股間に、主人公の頭をぐりぐり押しつけながら話す】

ほら……こうやつて頭押さえといてあげるから。

しつかり舐めなよ。

【すごく気持ちいい。】

余裕ぶつて主人公を言葉でいじめたいが、すぐにできなくなる
う……。

【甘つたるく喘ぐ。とても気持ちいい】
んつ♥』

主人公の願望を見抜くかのように、智絵里が両手で、主人公の頭を押さえつけてくる。
だがその力は、まるで強くない。

智絵里の細い腕では、主人公を拘束する事など、とてもできないのだ。

だから主人公は、いつでも逃げられる。

嫌だと思えば、すぐにこの場を去れる。

それは今回に限った事ではない。主人公が本当に智絵里と距離を置きたいと願つたなら、
そんな事は簡単にできるのだ。

そうしないのは、智絵里の事が好きだからだ。

智絵里が智絵里自身をどう思つていようと、主人公は智絵里の事が好きだからだ。
美しくて、裕福で、賢くて。

すべてを持つているように見えるのに、いつも所在なげで。

自分の足りないところばかりを見つめては自分自身を傷つけ、泣いている智絵里が、主
人公はいとおしい。

不安のあまり主人公に強く当たり、そのせいでもた自己嫌悪しては、あんな風に謝罪する姿さえ可愛らしい。

主人公は、たくさん嫌な思いをして傷ついて、世界を憎んでいる智絵里に、少しでもきれいなものを見せたい。

できる事なら、自分がそれになりたい。

汚れた場所に墮としたのは自分だと自覚しながら、本気でそう思っている。今だつて、せめて自分の気持ちを知つてほしいと願つている。

「うつとりと、ひとりごとのようだ。

またも気持ちよすぎて、素が出てしまう】

あ…………すこ…………

なんか今日、すごい舌熱い…………

【※6回※ 荒く、ゆっくりと呼吸する。

かなり気持ちいい】

はー。はー。はあ。

はー……はー。はー……

【甘つたるく喘ぐ。とても気持ちいい】

…………あ。あ。あ



【少し意地悪な声で誘惑する。

『頑張って』というのは『しっかりと舌を使って、自分の性器を愛撫しろ』という意味】
……ほら。ちゃんと、頑張って？

【甘々に媚びて、主人公を煽る。

この服を着ていた当時の悲しい思い出を、今優しくしてもらう事で、完全に拭い去りたいと思っている。

なのでわざと、このワンピースを着ていた当時のように、一人称を『ちい』二人称を『お姉ちゃん』にして話す】

※特に聞き手をドキつとさせるイメージでお願いします
ちいの事気持ちよくしてよ。

お姉、ちやん？』

〈主人公〉

「……っ……！」

主人公、昔を思わせる呼び方に素直に煽られると、望み通り、さらに丹念に愛撫する。
智絵里もまたそれに、びくつと大きな反応を示す。

三度目の絶頂はもう、すぐそばまできていた。

【低い声で、ゆっくりと喘ぐ。

めちやくちやに気持ちいい。快感に耐え切れなくなってきた】

……あ。う。あつ……♥

【※6回※ とてもゆっくりと呼吸する。

『ゆっくり』から『とてもゆっくり』という感じで、次第にさらにゆっくりになっていく。

ふーっ、はー。

ふーっ、はー。
ふーっ……はー……♥

【うわごとのように。今の愛撫のされ方が、ものすごく気持ちいい。

いくのを察し、言葉でだけ抵抗する】

あつ。う。

あ。あ。これやだ。やだ。や♥

【※4回※ 早く、荒く呼吸する。

すでに余裕がない】

ふーっ。ふーっ。ふーっ。ふーっ……♥

【ひとりごとのようになる。気持ちよすぎて】

ああつ……やば♥

【『もう』が『も』になる。まるで余裕がない】

も……イ……きそ。

【低く、ゆっくり喘ぐ。何とか抵抗している】

あ。あ。あ。あ♥

【※6回※ とてもゆっくりと呼吸する。

『ゆっくり』から『とてもゆっくり』という感じで、次第にさらにゆっくりになっていく。
なんとかいくまいとしている】

はーっ、ふ。

はーっ……ふ。

【ひとりごとのように。

あまりにも気持ちよすぎて、再び素に戻ってしまう】

やばい♥

【※3回※ とてもゆっくりと呼吸する。

『とてもゆっくり』という感じで、次第にさらにゆっくりになっていく。
なんとかいくまいとしているが、もはや無駄な抵抗である事を、智絵里自身も理解している】

はーつ。

はーっ
はーっ
はーっ
はーっ

【苦しそうに。いく事を悟る。

『もう』が『も』になる

も……無理つ

【余裕なく早口で】

あつ……
あつ……
あつ……



【ここでいく】

あああつ……
あああつ……
あああつ……



S E 1 3 智絵里がよろける音

【最初から最後まで流す】

裸足の白い足が、やわらかな草の上でよろける。

主人公はそれを、頭を押さえつけられたまま、智絵里の腰をつかむ形で支える。

小さく細い身体はそれだけで安定し、それは二人の物理的な力関係を、あまりも露骨に示していた。

小さくて弱い女の子。少し力を込めれば、簡単に壊れてしまう女の子。

だから、人よりも少し成長が早くて、身長にも骨格にも恵まれた主人公は、彼女を守らなくてはならない。

誰よりも安全な存在だと周囲に認識され、その期待通りのふるまいをしなくてはならない。

そのはずなのに、主人公はその責務から逃げた。

最も忌避され、非難されるべき存在に変貌した今も、当たり前のような顔をして智絵里のそばにいる。

醜い害虫に寄生された樹は、いつか腐り落ちて死んでしまうかもしれない。

それでも主人公は、自分の存在を許してほしかった。

誰も認めてくれなくていいから、智絵里にだけは、自分がここに居てもいいと言つてしまつた。

「※8回※ 荒い呼吸をする。

『早い』から『ややゆつくり』という感じで、次第にさらにゆつくりになつていく。
ふーっ、ふーっ、ふーっ、ふー……。
ふーっ。ふーっ。ふーっ。ふー……。
♥

主人公、泣きたくなるような衝動をこらえ、また、智絵里の呼吸が落ち着くのを待つ。それは、智絵里が主人公に支えてもらっているはずなのに、主人公が智絵里にすがり付いているような光景だつた。

主人公、ややあつてベンチから立ち上ると、ひざを折り、跪くような姿勢で智絵里にキスをする。

S E 1 4 主人公が立ち上がる音

【最初から最後まで流す】

「※3回※ キスする。

先ほど同様、イツた後にいつもしてもらっている、甘々な恋人キス。

何度も繰り返しても、はたから見ればテンプレート化しているように見えても、毎回とても幸せ】

ん♥

ちゅぱつ♥

ちゅぱつ……♥

【※1回※ キスする。舌をたっぷり絡めるディープキス】

んんぬ……♥」

それから、なんという答えが返ってくるか知りながら、お決まりの質問をする。
それほどまでに二人は、お互いの事を知りすぎていた。

「主人公」

「どんな味した……？」

「くすくす笑いながら。今日も同じ質問をされたので。

主人公はつまり、自分の口を介して智絵里に、智絵里自身の愛液を舐めさせ、その味を尋ねる行為を、日常的に行っている

え？

今日もしょっぱいよ？

汗みたいな味

美しい実を食い散らし、内側から汚して育つ虫は、きっと甘い夢を見ているのだろう。
我こそが恋人を貶める怪物だと知りながら、いつか許され、違う何かになれると信じずにはいられない。

現実から目を背けながらも、期待と希望を捨てられない。

そんな哀れな己を自覚しながら、主人公は智絵里と見つめ合い、同時にくすくす笑う。真夏と呼ぶには少し涼しい、午後のことだった。

「不満を述べているが、嬉しそうに。

先ほどの下着越しに舐める件とは違い、比較的理で理解できるので。

つまり、これは主人公なりの独占欲や、所有欲の表れなのだろうと智絵里は捉えており、それを思うと、嬉しくて、ぞくぞくするのである。

『あそこ』とは性器の事】

もうさあ。毎日人のあそこ舐めて、口移しして味聞くけど。

【嬉しそうに】

そういうのほんと書いてー。

人として終わってる。

さいてー♥

【※3回※ キスする。

とても『最低』となじった直後とは思えないような、甘々なキス】

んんう……。

ちゅつ♥

ちゅつ……♥

ここでフェードアウトして終了。